様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１２０４

研究課題名（和文）学校環境の異なる国語科教師同士が相互主体的に教科内容観を編み直す学習過程の解明

研究課題名（英文）An analysis on Learning Processes of Japanese Language Teachers with different environments intersubjectively Expanding Views on School Subject

研究代表者
丸山　範高（MARUYAMA, Noritaka）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：５０４１２３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、離島・山間部・都市部と、学校環境の異なる高校国語科教師がそれぞれ経験知として持っている教科内容観について、教師間での共通性と教師間での差異性とを概念化した。あわせて、個々の教師が、自身の教科内容観のかけがえのなさを認識するとともに、授業改善に向けてその教科内容観を編み直す過程も解明した。データは、授業観察とインタビュー調査によって収集し、研究手法としてナラティヴ・アプローチを採用した。本研究の意義は、教師の信念に基づいて教科内容観を概念化する傾向が強かった従来の国語科教師研究に対し、学習者の社会生活に資することばの学びという学習者起点での教科内容観を切り出した点に見出される。

研究成果の概要（英文）：The result of this study is to elucidate 1:individualities based on commonalities about views on school subject content of Japanese Language Teachers with different environments, 2:learning processes for class Improvement. This study analyzed teachers' narratives through interviews using
narrative approach. This research focused student-centered classses. The significance of this study is to portray language learning perspective for social abilities.

研究分野：国語科教師研究

キーワード：教科内容観　国語科教師　へき地高校　ナラティヴ・アプローチ　教師の学習

１．研究開始当初の背景

本研究は、国語科教師が保有する経験知としての教科内容観という視点から、従来の国語科教師研究が十分踏み込めていない、次の2点を解明することで、研究開始当初の研究状況を進展させた。

（ア）学校環境や経験年数などが互いに異なる教師同士の実践事例をすり合わせる中で浮き彫りとなる、教科内容観についての、教師間での共通性と個々の教師ならではの個別性

（イ）多様な教師の、多様な学習［授業改善］過程を通じて拡張される教科内容観の様相

の2点である。

ここでは、研究開始当初の背景として、国語科教師研究の現状を概観することで、本研究が研究史全体の中にどう位置づくのか、明らかにする。

これまでの国語科教師研究は、次の3点に類型化することができる。

（a）教師の学習方法に関する研究

授業リフレクション方法を開発した澤本ほか（1996）や、国語科教師が生涯にわたって専門的力量形成を図るための方法を網羅的に提示した鶴田（2007）が代表的な研究である。

これらの研究は、国語科授業改善に励む教師たちが参照すべき汎用性・普遍性ある方法を提示したという点で実効性が認められる。しかしながら、教師たちそれぞれに異なる個性を尊重した学習方法の多様性にまで踏み込めていない点が課題として残されている。

（b）特定教師の実践知に関する研究

優れた国語科授業を行う特定教師の経験に基づく実践知を概念化した藤原ほか（2006）（2012）が代表的な研究である。藤原らの一連の研究は、特定教師の経験の文脈を実践史に沿いつつ丁寧かつ厚く見取っているため、当該教師の授業実践固有のかけがえのなさを十分説明できている。さらに、その成果は、優れた実践を目指す他の教師たちが自らの経験世界に照合させながら参考にすべき指針としても機能し得る可能性を持っている。

しかしながら、学校環境が異なれば学習者の特性も異なるため教師の実践知やその構築過程も多様にならざるを得ないが、その多様性については十分触れることができていない。つまり、優れた特定の教師ならではの実践知のみならず、多様な国語科教師たちの多様な実践知とその構築過程（授業改善プロセス）の解明には至っていないのである。

（c）教師同士の学び合いプロセス研究

国語科教師同士の学び合いに関する代表的な研究は、細川（2010）や松崎（2012）である。細川（2010）では、教育実習生が自らの授業実践について語り合い学び合うことで、実践の中の出来事に対する反応基準であるフレームを明確化していく過程が描かれている。また、松崎（2012）では、初任期から中堅期へと移行する時期の若手教師が先輩教師に学びながら成長を遂げる過程が描き出されている。

これらの研究は、教師同士の学び合いのプロセスを解明しているという点で国語科教師研究に新たな局面を開いたと言える。ただし、研究対象として取り上げられた教師たちは、ほぼ同質の学校環境に置かれている者同士である。したがって、地理的環境や学習者集団の特性が互いに異なる学校に勤務していることから、多様な実践を行わざるを得ない国語科教師たちが、互いの固有性を尊重しながら自らの実践のかけがえのなさに気づくとともに、授業実践に関わる自らの課題を認識し、その解消を志すという教師の学習［授業改善］過程については解明できていない。

以上（a）（b）（c）より、国語科教師研究は、汎用性・普遍性ある教師の学習方法論の開発、あるいは、特定教師ならではの限定的な実践知の概念化、あるいは、ほぼ同質の教師相互での学び合い過程の解明、それぞれを中心に展開されてきたと総括できる。したがって、多様な学校環境や、互いに異なる教師の個性など、多様性と個別性とを含んだ国語科教師研究のあり方が問われていると言える。

【引用文献】

藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治（2006）『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』溪水社

藤原顕・荻原伸（2012）「受験体制の中で自分の教育観にこだわる－ジレンマのやり繰りと教師の学び」グループ・ディダクティカ『教師になること、教師であり続けること－困難の中の希望－』勁草書房 pp.159-181.

細川太輔（2010）「学生の学び合いによるフレームの明確化－協働学習的アクション・リサーチの教育実習に向けて－」全国大学国語教育学会『国語科教育』67pp.35-42.

松崎正治（2012）「同僚に学びながら教師になっていく－初任期から中堅期への成長－」グループ・ディダクティカ『教師になること、教師であり続けること－困難の中の希望－』勁草書房 pp.115-136.

澤本和子・お茶の水国語教育研究会（1996）『わかる・楽しい説明文授業の創造－授業リフレクション研究のススメ－』東洋館出版社

鶴田清司（2007）『国語科教師の専門的力量の形成－授業の質を高めるために－』溪水社

２．研究の目的

本研究の目的は、学校環境の異なる複数の高校国語科教師たちが、互いの授業実践を相互主体的にすり合わせる中で、国語科教科内容に対する自分自身の見方・考え方（教科内容観）のかけがえのなさを認識するとともに、授業改善に向けてその教科内容観を編み直すプロセスを解明することにある。なお、本研究では、国語科を構成する諸領域のうち、「読むこと」に関する領域の事例を研究対象としている。

次の 3 点を通して、研究目的の解明を図った。

（ア）学校環境の異なる高校国語科教師として、離島・山間部・都市部の高校、大規模校・中規模校・小規模校、さらには、若手教師・中堅教師・熟練教師というように、多様な教師たちの事例を取り上げる。

（イ）各教師が持つ、実践経験をベースとした国語科教科内容観について、授業観察とインタビューを通して分析を深め、教師間での共通性と、教師ごとの個別性とを解明する。

（ウ）（イ）で解明した国語科教科内容観を教師間で相互にすり合わせる。そして、各教師のかけがえのない固有性を尊重しつつも、授業改善に向けた今後の課題とその改善プロセスとを教師ごとに解明し、多様な教師の多様な学習過程モデルを構築する。

本研究は、従来の国語科教師研究では十分踏み込めていない、多様性と個別性とを含み込んだ国語科教師の教科内容観のあり方について、一定の成果を導き出そうというものである。さらには、異質な教師同士が多様性を尊重する中で、自らの実践のかけがえのなさを認識しつつ、授業改善課題の解消に励むという教師学習のあり方を提案することも射程に含まれている。

３．研究の方法

本研究は、勤務する学校環境が互いに異なる複数の高校国語科教師を研究協力者とする 3 カ年の計画であり、各教師が保有する経験知としての教科内容観を研究対象としている。そのため、教師の認識世界に迫る必要があり、インタビューを主な研究手法とした。ただし、インタビューでの教師の語りが概括的・観念的な内容に終始しないよう、授業観察を併用した。授業観察で、現象としてあらわれ出た授業の具体的事実を捉え、それらの事実を適宜引用しながらインタビューを制御することで、教師の語りに具体性と説得性が引き出されるからである。

本研究で解明するのは、教師たちが実践経験を通して形成しつつある教科内容観という授業実践を支える知である。それは、インタビュアーである筆者の問いかけに応ずる形で語られた教師たちの語りを教科内容観として組織化することでアプローチできるものである。そのため、教師の語りを断片的、無秩序に寄せ集めるだけでは、適切な概念化はできない。そこで、本研究は、「経験の組織化としての物語」（やまだ 2006）と言われるナラティヴ・アプローチを研究方法として採用した。

ナラティヴ・アプローチの基礎的特徴は、先行研究により、次の通り具体化されている。「出来事や経験の具体性や個別性を重要な契機にしてそれらを順序立てることで成り立つ」（野口 2005）ものであるとともに、「個別の体験を当事者の立場から描くことにおいて有力な視点を提供する」（森岡 2013）。さらに、出来事を結びあわせる中で生まれる「意味づけが問われ」、「語り手と聞き手の相互行為」による「物語の変化プロセス」（やまだ 2007）が重視される。本研究では、当事者としての教師の視点を重視しつつ、語り手と聞き手の協同相互行為を通じて、国語科教師の個別具体の実践経験の意味づけを教科内容観として順序立て組織化した。さらに、教科内容観は固定化したものではなく、授業改善に向けての修正の見通しを得るという変化のプロセスをも内包する。このように、本研究での分析は、ナラティヴ・アプローチに関わる種々の特徴に合致するため、研究方法としてナラティヴ・アプローチを採用した。

年度ごとの研究方法は、次の通りである。

≪平成 26 年度≫

山間部や離島にある高校で勤務する複数の国語科教師を対象に、授業観察と半構造的インタビュー調査を行った。

調査では、授業の事実に即しながら各教師の実践の固有性を聞き取るよう努めた。

得られたインタビュー・データはすべて文字化し、実践の文脈をふまえながら読み込み、意味のまとまりごとに区分けし概念化するというカテゴリー分析をした。分析の結果得られた概念は、カテゴリー、コア・カテゴリーへと統合し、教師の教科内容観の全体構造を解明した。

≪平成 27 年度≫

離島・山間部・都市部と、多様な高校に勤務する複数の国語科教師を対象に、授業観察と半構造的インタビュー調査を行った。26 年度調査対象者は継続して追跡調査を行うとともに、新規調査対象者を加えて調査を行った。

調査では、他の教師の事例を相互に参照しながら、個々の教師の実践の固有性を浮き彫りにした。

得られたインタビュー・データはすべて文字化し、実践の文脈をふまえながら読み込み、意味のまとまりごとに区分けし概念化する

というカテゴリー分析をした。分析の結果得られた概念は、カテゴリー、コア・カテゴリーへと統合し、教師の教科内容観の全体構造を解明した。さらに、教師間での共通性と個別性についての考察を行った。

≪平成 28 年度≫

前年度（27 年度）研究協力者を対象とした追跡調査を行った。調査内容は、27 年度と同様で、授業観察と半構造的インタビューである。得られたインタビュー・データは、カテゴリー分析を行い、教師間での共通性と個別性についての考察を行った。

【引用文献】

森岡正芳（2013）「ナラティヴとは」やまだようこほか編『質的心理学ハンドブック』新曜社 p.276.

野口裕二（2005）『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房 p.6.

野口裕二（2009）『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房 pp.8-10.

やまだようこ（2006）「質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念」『心理学評論』49-3pp.440-441.

やまだようこ（2007）「ナラティヴ研究」やまだようこ編『質的心理学の方法』新曜社 pp.65-66.

４．研究成果

本研究の成果は、離島・山間部・都市部の高校、大規模校・中規模校・小規模校、さらには、若手教師・中堅教師・熟練教師と、多様な高校に勤務する多様な国語科教師の、実践経験に裏打ちされた教科内容観（国語科「読むこと」の領域に関わる内容観）の相対的特質を概念化したことに集約される。なお、概念化された教科内容観は、固定化・絶対化したものではなく、過去から現在そして未来へと続く国語科授業改善の過程を見通した可変性に富んだ実践的教科観として描き出した点に特徴がある。

本研究で解明した国語科教師の教科内容観は、次の各点において先行研究・先行実践とは異なる切り出し方を行っており、そこに本研究の意義がある。

○　従来の国語科教師研究では、教師のライフヒストリーや教師自身の信念（学習者に教え学ばせたいと考える内容）を前面に押し出しながら、教師の教科内容観を概念化してきた。一方、本研究は、特定地域の学習者が社会生活を円滑に送るために必要なことばの力という、学習者が抱える課題を起点に教師の教科内容観を切り出している。

○　国語科教育実践のうち、とりわけ高校国語科を対象とした実践では、教科書に象徴される教科専門的内容に傾斜した実践が中心となりがちである。一方、本研究では、教科書を尊重しつつも絶対化せず、学習者の社会生活力の育成に資することばの学習のあり方を模索しつつ、授業改善に励む教師たちの事例を取り上げた。それにより、社会生活を営むために必要なことばの学習という視点に立ち、教科書を相対化しつつも、国語科＝ことばの学習を担う教科であるというアイデンティティを揺るがすことなく、学習者を起点に構築された教師たちの教科内容観を描き出すことができた。

以下、現時点までに論文化できている内容と、論文化できていない内容とを切り分けて、それらの概要を説明する。

論文化できている内容として、離島や山間部の高校に勤務する国語科教師たちの教科内容観について、教師間での共通性と教師ごとの個別性を解明したことが挙げられる。詳細は、後述の発表論文に譲るとして、ここでは論文の概要のみを記す。

○　教師間で共通する教科内容観は、教科書教材のことば、および、ことば相互の関係性を丁寧に読み取らせること、さらに、その読みによって学習者の世界観の偏狭性を解消させたいという観である。なお、こうした教科内容観は、教職経験の多寡に関わらず、若手教師にも熟練教師にも、共有される傾向にある。

○　学習者の世界観の偏狭性を解消したいという教科内容観は、地域の学習者が抱える課題の認識を起因として生み出されていた。つまり、地域の学習者が高校卒業後の社会生活に十分適応できていない姿を見聞きしたりすることで、多様な価値観を持つ他者と円滑な社会生活を送れるように導く学習指導実践をなし得ていないのではないかとの思いに至り、先の教科内容観が生み出されたと考えられる。

○　他方で、教科内容観には、教師ごとに異なる側面も解明された。つまり、学習者が抱える世界観の偏狭性を解消させるためのアプローチをどう進めるかの違いである。ある教師は、学習者にとって身近でない未知の世界に出会わせるべく、ことばが持つ表象力に指導の重点を置く。また、別の教師は、学習者の短絡的・排他的な思考様式を脱却させるために、結論に至るまでの認知過程を重視し対比的思考様式になじませることに指導の重点を置く。

○　また、若手教師と熟練教師とでは、教科内容観を学習成果として定着させるための、実践形態の面において対照的な特徴が見出された。若手教師は自分ならではの授業スタイルを求めて試行錯誤するがゆえに実践形態の全体像が流動的になりがちである。一方、熟練教師は、個別状況に臨機応変に対応する柔軟性は持ち合わせているが、授業における自分らしさが確立されているため、実践形態が流動的でなく安

定的である。

最後に、実地調査は終了しているが論文化できていない内容について、成果の概要を説明する。

○　１点目は、離島や山間部の高校とは対照的な学校環境にある都市部の進学指導中心の高校に勤務する教師の教科内容観と、離島や山間部の高校教師のそれとを比較したときに浮き彫りとなる教科（国語科）内容観の共通性についてである。多数の事例を収集しているわけではないので性急な一般化普遍化は慎まなければならないが、以下のような共通性が指摘できる。

いずれの地域の教師たちもが共通して持っている教科内容観は、教材文のことばを読むことで表象される教材世界像を、学習者自身の社会生活につなげるという実用的な教科内容観である。離島や山間部の高校生と、都市部の高校生とでは、高校卒業後に活躍する社会の性質は異なるかもしれない。しかしながら、どのような社会で活躍するにせよ、教材文のことばを通じて表象される世界について認識を深め、学習者既有の限られた世界観を拡張させたいと、いずれの教師もが考えているのである。

○　２点目は、多様な国語科教師たちが教科内容観を拡張する過程（＝課題解消に向けて授業改善を図る中でこれまでの教科内容観を更新する過程）を描き出すことである。なお、こうした拡張過程は、一般化・普遍化できない。なぜなら、地域での学校の役割、学習者の実態、教師の個性など、この拡張過程に影響を及ぼす要因が、多種多様だからである。したがって、事例として取り上げるにとどめざるを得ない。今回の調査事例では、以下のような事例が取り出された。

・　ある教師は、教科書だけの授業展開では、教材文のことば相互の関係性把握が円滑に進まない学習実態を課題視する。そこから、学習者の視覚に訴える ICT 技術をいかに活用すれば、ことば相互の立体的関係構造が把握しやすくなるのかについて研究しようと試みている。この事例では、ことば相互の関係構造について、ICT 技術を包摂した教科内容観へと拡張が果たされようとしている。

・　別のある教師は、継続的かつ主体的に教材文にじっくり向き合うことのできない学習実態を課題視する。そこから、教材文に対する学習者の関心を惹起するに堪える発問はいかにあるべきか、また、そうした発問は、教材研究段階で、どのような教材世界像を表象することで作れるのか、について研究しようと試みている。この事例では、教科書の記述のみに依拠した従前の教材世界像の捉え方を拡張することで課題解消の見通しを見出しいている。たとえば、学習者の実世界、あるいは、教材そのものの文化的背景を、教科書の記述と組み合わせながら教材世界像を広く捉えることで従前の教科内容観を拡張しようとしている。

○　３点目は、研究の総括として多様な教師の多様な個性を尊重した教師の学習（授業改善）過程モデルを概念化することである。教師の学習過程についても、教科内容観の拡張過程と同様、一般化・普遍化を志向し過ぎると、各教師の実践の固有性が捨象されてしまう。したがって、各教師を取り巻く状況をできるだけ具体的に記述しつつ事例として取り上げることが適切である。今回の調査事例では、以下のような事例が取り出された。

・　ある教師は、学習者の主体的表現活動の授業に占める割合を増大させたいと考えているが、どうしても教師が意図する方向に沿った単線的な授業展開になりがちな現状を課題として捉えている。そこで、単元全体の指導計画を、「教材をどう読み解くか」ではなく「教材を介してどんなテーマの思索を深めるか」という観点から作成し直すことが課題解消の鍵であるという認識を得て実践を試みている。つまり、「教材をどう読み解くか」では、正解が定まりやすいため教師の意図に沿った授業展開になりやすいのに対し、「教材を介してどんなテーマの思索を深めるか」では、正解の根拠が教材文のみならず学習者の既有知識までにも及ぶため、正解が開かれ、必然的に学習者の主体的創造的表現活動が生まれるようになったと語る。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① <u>丸山　範高</u>、離島高校国語科教師の教科内容観の構造的特質―熟練教師と若手教師における共通性と個別性―、和歌山大学教育学部紀要―人文科学―、査読なし、第 67 集、2017 年、pp.1-8.

② <u>丸山　範高</u>、高校国語科教師の教科内容観の実践化プロセス―離島・山間部高校における学習者が抱える課題に寄り添う授業実践事例から―、教師学研究（日本教師学学会）、査読あり、第 18 号、2016 年、pp.13-21.

〔学会発表〕（計１件）

① <u>丸山　範高</u>、学習者が抱える課題から授業を構想・実践する国語科教師の教科内容・授業構成観、第 128 回全国大学国語教育学会、2015 年 5 月 30 日、姫路商工会議所（兵庫県姫路市）

６．研究組織
(1)研究代表者
　丸山　範高（MARUYAMA,　Noritaka）
　和歌山大学・教育学部・教授
　研究者番号：５０４１２３２５